

明代雲南に残した日本人の漢詩

——その一『滄海遺珠』書誌学研究——

王 宝平

中国の南西部に位する雲南省大理市に、日本四僧塔という墓が残っている。「日本四僧」とは、明代初頭に現地に流された4人の日本人の僧侶という。さらに調査を進めると、明の地元の人が編集した詩集『滄海遺珠』に、天祥・機先・大用という日本人の漢詩が30首掲載されていることがわかった。小論は、『滄海遺珠』の書誌学研究と日本人漢詩の研究の内、まず第一部として『滄海遺珠』の編者、版本、相違および評価に関する研究成果を公にし、基礎作業としておきたい。

『滄海遺珠』については、たとえば、王文泰『明代人編選明代詩歌総集研究』⁽¹⁾や余嘉華「沐昂対明代文学的貢献」⁽²⁾など、明代文学の研究者が触れたことがあるものの、『滄海遺珠』に関する書誌学研究は行われていない。とくに、後述の『滄海遺珠』八巻本の書誌については、小論が初めてであろう。

なお、「滄海遺珠」とは、取り残された大海の珠という本来の意味から、優れた作品や人材が埋没される意味として使用されている。

一 『滄海遺珠』の編者

『滄海遺珠』の編者については、諸説紛々としている。

1. 編者不明

『四庫全書総目提要』には、「滄海遺珠四巻、浙江范懋柱家天一閣蔵本、不著編輯者名氏。」とある。『天一閣書目』（范邦甸ほか編、1808年刊）の巻末に収められている「進呈書目」には、「滄海遺珠四巻。」とのみ記載。『天一閣見存書目』（薛福成編、1889年刊）の巻末所収の『重編進呈書目』にも、「滄海遺珠四巻、不著編輯者名氏。」とされる。また、後述の『八千卷樓書目』（丁申・丁丙編、1923年刊）巻十九記載の四巻本、台湾旧中央図書館所蔵清古歛堂鈔本（八巻）、同清呉県黄氏士

礼居鈔本（八卷）で、いずれも編者に関する記載が見当たらない。

2. 明珠燦輯

清阮元撰、李慈銘校訂『文選樓藏書記』（巻四）には、「滄海遺珠集四巻、明珠燦輯。海陽人刊本。是書編輯各詩、自朱經而下凡二十一人。」とある。

明代の珠燦という人が編輯し、広東海陽の人が刊行したと記載。珠燦については、種々調べたが、見当たらない人物で、後述の明成化十三年本を世に出した江西万載県令陳燦は、広東海陽の出身で、刊行者の彼を編集者に誤認したのであろう。

3. 明沐英選

『江蘇採輯遺書目録』（集部・専集類）には、「滄海遺珠、明都督沐英選。按此書選朱經等十八人詩三百餘篇、共四巻抄本。」とある。「沐英」は後述の息子の沐昂の間違いで、「十八人」は21人のミスであろう。

4. 明沐昂編

『滄海遺珠』の編者については、明代の複数の蔵書目録で、沐昂（字、景顒）と記載されている。

- a 「沐昂滄海遺珠集四巻、輯明初官於滇及謫戎者之詩。」（明黃虞稷編『千頃堂書目』巻三十一）
- b 「滄海遺珠四巻一冊，沐景顒。」（明祁承燦『澹生堂蔵書目』）
- c 「滄海遺珠集四巻、皇明都督沐景顒選集、皆諸選所遺、得二十一人詩二百餘首。」（明周弘祖編『百川書志』巻十九）

下って、『四庫全書』所収本の冒頭に、楊士奇が正統元年（1436）に寄せた序文があり、編者を沐昂と明記しているため、沐昂が編者であることが紛れない事実となった。

沐昂（1379～1445）、字は景高、素軒を号とする。明4代目の皇帝仁宗（朱高熾）の即位（洪熙元年、1425、在位一年のみ）後、諱を避けるべく、字景高を景顒と改めた。⁽³⁾ 沐英の三番目（一番下）の息子に当たる。沐英（1344～1392）、安徽定遠の人、朱元璋の養子、明政権の樹立に多大な手柄を立てた功臣である。そもそも雲南は漢の時代より郡を設置し、中国の支配下にあったが、唐の半ばごろ、唐の中央政権と雲南の地方政権—南詔との間に戦争が起こり、唐軍は20万人もの戦死者

を出す、大敗を喫した。その後、雲南は中国から 600 年ほど独立し続ける。明洪武十五年（1382）、沐英の率いる軍隊が大理を陥落させてから、雲南は明朱を正朔と奉じ、再び中国の版図に帰した。その後、沐英およびその一族は朝廷からの深い信頼を受けながら、264 年にわたって、明朝の滅亡まで雲南を世襲制で支配していた。

沐昂は、長年雲南で二番目の兄黔国公沐晟（?～1436）の補佐役を果たした。洪熙元年（1425）、右軍都督同知（副軍事長官）、宣徳十年（1435）、右都督に昇進。任期中の正統元年（1436）に『滄海遺珠』を編集。また、同じ年に、兄沐晟が死去。兄の子がまだ幼いため、沐昂はその代わりに雲南を鎮守した。正統四年（1439）、左都督に任ぜられ、同十年（1445）、雲南で死去、⁽⁴⁾諡号は武襄、定辺伯に封じられた。⁽⁵⁾著に『滄海遺珠』以外に、『素軒集』十二巻がある。⁽⁶⁾

明代前期の詩壇におけるリーダーとも称される楊士奇（後述）は、次のように沐昂のことを評価している。

都督公恭和端厚、好学師古、雖共武服而重文事、雖出動戚之門而礼賢下士。祭穎陽之雅、歌投壺、⁽⁷⁾羊叔子之輕裘緩帶、⁽⁸⁾風度兼之。⁽⁹⁾

と、優しい人柄で、軍人でありながら、学問を重んじ、皇族の家出でありながら、人々を礼遇する、という。また、

以忠謨宏略、佐兄黔国公、為朝廷鎮撫西南一方。而綏靖餘暇、適情吟詠以及斯事、非兼文武之智而能之哉。⁽¹⁰⁾

と、忠誠心や策略で兄黔国公を助け、朝廷のために雲南を守る。同時に、餘暇を利用して詩を吟じ、詩集『滄海遺珠』を編集した。文武両道の素養を備えていなければ、できるはずはなかろう、という。

要するに、沐昂は將軍であるが、詩文を嗜好し、文化活動に熱を入れた。その反面、軍事作戦は必ずしも得意とせず、大敗を喫して、朝廷から厳しく罰されたことさえある。⁽¹¹⁾彼本人もこの点を認めているようである。⁽¹²⁾彼の書齋「素軒閣」には、経史子集に関する蔵書が豊富に蓄えられ、いつも文化人を召集して、詩文等を切磋琢磨した、という。⁽¹³⁾その故、彼の詩文集は『素軒集』と名づけられ、巻1～巻10は詩で、巻11～巻12は文で、そのうちの第11巻には、他人の著作のために寄せた13点の序文が集められている。苛烈な戦争が展開される中、平和な一面を立

派に見せている。このような文化的素養を備えているだけに、『滄海遺珠』が編集されたのであろう。

さて、『滄海遺珠』の巻頭に楊士奇が序文を寄せている。楊士奇（1365－1444）、名は寓、字は以行、東里を号とする。江西泰和（現、泰和県澄江鎮）の人。布衣をもって翰林院に入り、編纂官に当てられる。明朝の五帝に仕え、皇帝を補佐すること40餘年に亘る。正統元年（1436）『滄海遺珠』の序を書く時、榮祿大夫少傅（従一品）兵部尚書兼華蓋殿大学士（皇帝の秘書役）を担任中。高官である彼は、文学上においても、楊榮・楊溥らとともに明初の「三楊」が代表するような「台閣体」という詩派を作り、そのリーダー役を務めていた。著に『東里全集』等が残り、「素軒記」（『東里続集』巻二）、「滄海遺珠序」（同巻十四）、「顯忠輔運推誠宣力武臣特進榮祿大夫右柱国太傅黔国公追封定遠王諡忠敬沐公神道碑銘」（同巻二十六）が、本全集に所収されている。沐昂のために「素軒記」と「滄海遺珠序」を、沐昂の兄のために神道碑を書いた事実からすれば、沐一族との交誼の深さがうかがえる。

二 『滄海遺珠』の版本

『滄海遺珠』は四巻本と八巻本が現存する。詳細は下記のとおり。

（一）四巻本

1. 明成化十三年（1477）重刊本

四巻、現存する最も早い刊本、安徽図書館蔵。まだ閲覧の機会を得ていないが、袁州府（現、江西省）万載県儒学訓導葉福という人が、成化十三年（1477）歲次丁酉春正月付けで書いた跋文が、巻末に掲載されている。訓導とは、儒学校で教授・学正などを補佐するポストを指す。葉福のこの跋文によれば、万載県令陳侯が『滄海遺珠』一冊を獲得し、愛読していた。本書を広く伝えるべく、改めて刊行した。

⁽¹⁴⁾ 換言すれば、『滄海遺珠』は、楊士奇の正統元年（1436）の序が寄せられた初版より41年経過した成化十三年（1477）に、陳侯により重刊された。⁽¹⁵⁾ 陳侯の事跡については必ずしもつまびらかではないが、同跋文では、名は燦、字は崇文、癸丑（宣徳八年、1433）の貢士、広東海陽人、という。⁽¹⁶⁾

2. 四庫全書本

これは一番広く流布しているテキストで、『文淵閣四庫全書』本、『文津閣四庫全書』本（いずれも、集部総集類所収）等が存するが、文淵閣本に即して記せば、まず、総纂官_臣紀昀・_臣陸錫熊・_臣孫士毅・総校官_臣陸費墀と記された「提要」があり、「乾隆四十二年三月恭校上」という日付となっている。そして、詳細な「滄海遺珠目録」が掲載され、楊士奇の正統元年（1436）に書いた「滄海遺珠原序」が続いている。その後、本文があり、「滄海遺珠卷一」と記され、次の行に「明沐昂編」とある。本文には下記の作者の漢詩が収録されている。

卷一（6人、92首）

朱経（浙江杭州人、17首）・方行（浙江黄岩人、33首）・朱綝（本籍地未記載、17首）・曾烜（本籍地未記載、12首）・周昉（山東新城人、2首）・韓宜可（浙江山陰人、11首）。

卷二（5人、74首）

王景彰（浙江括蒼人、9首）・楼璉（浙江金華人、3首）・王汝玉（四川、21首）・遼昶（河南覃懷人、21首）・平顕（浙江虎林人、20首）。

卷三（6人、58首）

胡粹中（浙江山陰人、17首）・楊宗彝（浙江紹興人、10首）・劉叔讓（江蘇広陵人、4首）・楊子善（浙江天台人、7首）・張洪（江蘇常熟人、⁽¹⁷⁾ 5首）・范宗暉（浙江四明人、15首）。

卷四（4人、53首）

施敬（浙江錢塘人、23首）・僧天祥（日本人、11首）・僧機先（日本人、18首）・僧大用（日本人、1首）。

計21名、277首となっている。⁽¹⁸⁾ 所収詩人の数については、『文津閣四庫全書』収載「提要」では20名と1名少なめに計算している。また、詩の数については、文淵閣と文津閣の「四庫全書提要」では、「共三百餘首」と多めに計算している。

21名の作者については、上記に示したとおり、浙江出身者が半分を占めて、11名に達している。その他、出身地不明者や江蘇出身者が各2人、山東・河南出身者が各1名、そして日本人が3名となっている。彼らの多くは雲南への流寓者や流罪人で、⁽¹⁹⁾ 編者沐昂との往来詩が多数見られることから、沐昂と懇意のある人が多

いことが推測できよう。⁽²⁰⁾

また、詩の特徴としては、明るく、穏やかなものが多く、楊士奇の台閣体という詩派に属する詩が多いと指摘されている。⁽²¹⁾

さて、『四庫全書総目提要』では、『四庫全書』所収本は「浙江范懋柱家天一閣蔵本」とされている。

乾隆三十七年（1772）正月、乾隆帝は詔書を頒布し、全国規模の遺書収集キャンペーンを展開した。浙江では12回、4523種の本を献上したが、その内の天一閣の主人范懋柱は、696種、5258巻にのぼる本を進呈して、全国一の寄贈記録を作った。進呈書リストについては、『天一閣書目』（巻末にある「進呈書目」）にも、浙江の進呈書を集めた『浙江採集遺書総録』⁽²²⁾にも、記録が残っている。しかし、『天一閣書目』には「滄海遺珠集四卷」としか記されていないし、『浙江採集遺書総録』では、『滄海遺珠』の記載が漏れているため、四庫全書本『滄海遺珠』のテキストに関する情報は、「提要」を頼りにせざるをえない。しかし、「提要」には、四巻、編輯者不明という記載のみで、写本か刊本に関する情報は提供されていない。

では、明清の蔵書目録にはどのように著録されているのか。明代の書目には、上述の『千頃堂書目』、『澹生堂蔵書目』、『百川書志』に示した如く、写本・刊本に関する記述が見当たらない。一方、清代の蔵書目録には、記録が次の二つしか見つからず、共に抄本と記されている。

a 「滄海遺珠四卷、不著編輯者名氏、抄本。」（『八千卷樓書目』卷十九、清末丁申、丁丙）

b 「滄海遺珠四卷、旧抄本、明沐某、楊士奇序正統元年。」（『碩宋樓蔵書志』卷117、清末陸心源）

要するに、『滄海遺珠』の初版が未見で、明成化十三年（1477）の重刊本が現存最古の刊本であるが、あまり普及せず、大半は写本の形式で流布していたことがわかる。

『滄海遺珠』は四庫全書に収められてから、次のような復刻本が誕生した。

① 『四庫全書珍本』三集（『文淵閣四庫全書』が底本）、集部総集類第1521冊、台北：台湾商務印書館、1972年。

- ②『文淵閣四庫全書』集部総集類第 1376 冊、北京：商務印書館、2006 年。
- ③『雲南叢書』第 147 種、第 306 冊、趙藩・陳榮昌等輯、1914 年雲南叢書処木刻本。
- ④『叢書集成統編』文学類第 114 冊、台北：新文豊出版公司、1989 年拋雲南叢書影印本。
- ⑤『叢書集成統編』集部第 150 冊、上海：上海書店、1994 年拋雲南叢書影印本。
- ⑥『回族典藏全書』第 156 冊、蘭州：甘肅文化出版社・寧夏人民出版社、2008 年拋雲南叢書影印本。

上に掲げられた版本のうち、③『雲南叢書』本のみが刊本＝木版印刷で、残りはすべて影印本である。そして、『雲南叢書』本は、その後、「滇叢」を含めて『叢書集成統編』（新文豊出版公司）、『叢書集成統編』（上海書店）、『回族典藏全書』の底本となり復刻しつづけられた。

『雲南叢書』本は、明成化十三年重刊本以来初めての刊本で、線装本、一冊、半葉 10 行、行 21 字、注文小字双行同、黒口、単魚尾、題簽に「雲南叢書 趙藩題」とあり、見返しに「雲南叢書集部之七十六 / 滄海遺珠 共四卷 / 雲南図書館蔵板 甲寅年刊」と印刷。甲寅年は民国三年（1914）。文淵閣本に見られる「滄海遺珠目録」なし。書頭に楊士奇「原序」、袁嘉穀「滇叢」、「欽定四庫全書提要」がついており、巻頭に「滄海遺珠卷一 雲南叢書集部之七十六 / 沐昂景顛纂」と刻す。底本は『文淵閣四庫全書』。

「滇叢」とは、『雲南叢書』の編纂にかかった袁嘉穀が撰した『滄海遺珠』の解題である。⁽²³⁾

袁嘉穀（1872～1937）、また袁嘉谷は、字は樹五、澗圃を号とする。一号は屏山居士、雲南省紅河州石屏県の人、清末の雲南の著名な文化人である。清光緒二十九年（1903）の進士、庶吉士に選ばれる。その後、経済特科の試験で編修を授けられる。日本へ教育視察に派遣され、雲南留日学生監督を兼任。『東遊日記』四巻を成す。帰国後、学部編訳図書館局長、浙江提学使兼布政使等を歴任。辛亥革命後、国会参議院議員、雲南省参議院議員、雲南塩運使、東陸大学（現、雲南大学）教授、雲南省図書館館長等を務める。とくに経史に詳しい。『雲南大事記』『滇繹』『石屏県志』『経説』『講易管窺』『飛春課経録』『臥雪堂詩集』『臥雪堂文集』等、多数の著書が

ある。⁽²⁴⁾

(二) 八巻本

1. 清呉県黄氏士礼居鈔本（図1参照）

台湾旧中央図書館蔵。八巻、4冊、鈔本、表紙なし。書高27×幅17.6cm。界・辺なく、半葉10行、行20字、注文小字双行・字数同。版心白口、双魚尾、上魚尾で「滄海遺珠卷幾」と、下魚尾で葉次を記す。

本文巻頭に「滄海遺珠集卷之一」とし、編者の記載なし。巻七で第十六葉が欠けている。内容については後述に譲るが、全書に下記の書き入れや識語が見られた。ページ順に記しておく。

(1)「道光庚戌（三十年、1850）秋八月、復生孫雲鴻觀。」と墨書、側に「孫雲／鴻印」「復生」印がある。

孫雲鴻、号は復生、福建漳州龍溪の人、味古書室という書齋を持ち、『唐才子伝』（元辛文房撰）、『小石帆亭著録』（清翁方綱撰）、『正気堂集』（明俞大猷撰）を刊行した。⁽²⁵⁾

(2)「道光甲午（十四年、1834）四月、過味經書屋、拜読三復、欣幸無既。／婦樂安女士謝翠霞識。」と墨書。

(3)黄丕烈の嘉慶二十四年付の跋文。側に「老／堯」と捺印。跋文は下記の通り。

「余既從昭文同年張子和令嗣處、借得滄海遺珠八卷抄藏之、已幸較四庫本多詩四卷、然無前序并目、不知何以有四卷、八卷之異。伏読四庫全書提要、知有楊士奇序、得悉選者為沐英後人、其止有四卷顛末不之及。頃見小讀書堆遺書精鈔本、前載楊序、而後有成化間葉福跋、云吾万載令陳侯僅得一冊、珍襲歌詠、猶恐伝之未博、故重刻之、以博其伝。方信四卷之止得半也。因補録楊序、葉跋于後。方信見聞不広、不足以定是非而決疑、信有如是夫。己卯（嘉慶二十四年、1819）秋、復翁。」（図2参照）

黄丕烈は昭文（現、常熟市）の張子和の子より、滄海遺珠八巻を借りて書写した。四庫全書本より4巻多いが、序文も目録もなく、なぜ四巻・八巻の相違があるのか分からない。四庫全書提要で、楊士奇の序を知り、選者が沐英の子孫であることが分かったが、四巻に止まる顛末については言及されていない。最近、小讀書堆遺書

の『滄海遺珠』の精鈔本を見た。前に楊士奇の序、後に成化年間の葉福の跋文があり、跋文では、わが万載令陳侯が一冊本の『滄海遺珠』を獲得し、大事に収め、愛読していた。なお広く伝わらないのを懸念して、広く伝えるため、改めて刊行した。これで、四卷本は八卷本の半分に過ぎないことを信じ、楊士奇の序、葉福の跋を巻末に補って写した、という。

黄丕烈(1763～1825)、字紹武、又は蕘圃・蕘翁・蕘夫等、号は復翁・抱守老人・蕘圃主人・士礼居主人等多数あり、江蘇吳県の人。その室名に、百宋一廬・学耕堂・学圃堂があり、清代の著名な文献学者。

小讀書堆は、著名な顧之逵の蔵書楼である。顧之逵(1752～1797)は元和(現、蘇州)の人、字は抱冲、清代の著名な蔵書家、とくに黄丕烈と親しく付き合う。『芸苑摺華』(48種)などを編集。

(4) 張燮の嘉慶五年付の跋文。

「(前略)此本予得之江寧、計八卷、共五十二家、較四庫本已多大半。然無序無目、不知尚有缺逸否。豈当日採訪進呈之本、僅得前四卷耶。惜無他本可校、姑藏之書庫、俟得完帙、補其脫焉。嘉慶五年(1800)八月、張燮子和氏誌。」(以上、遊び紙)

江蘇江寧でこの本を入手した。52人の詩を収録した、四庫全書本より内容の多い八卷本であるが、序文も目録もないため、脱落がないのか、見当がつかない。四庫全書編纂時に収集した進呈本は、もとより『滄海遺珠』四卷本かもしれない。惜しいことに、校訂できる他のテキストがないゆえ、書庫に入れて、後日、足本があれば、その欠を補うことにしよう。

張燮、字は子和、蓉鏡、または芙川を号とする。昭文(別称、琴川、現、常熟市)の人。乾隆五十八(1793)の進士、官は寧紹台兵備道に至る。黄丕烈とともに「書淫」(古書中毒症)の一人とも言われる。妻姚畹真是、芙初女史、または畹芳女士を号とする。主人と同様な愛書家で、夫妻で「双芙閣」という蔵書印を使用した、という。著に『味経書屋詩稿』等が存する。

(5) 黄丕烈の書き入れ。卷一第一葉欄頭に下記の書入れがある。

「朱筆從小讀書堆精鈔本補、蓋張本板壞闕失故也。復翁。」

張燮の蔵本も版木が痛み、欠如している箇所があるため、小読書堆精鈔本に依拠して朱筆で補写する、という。

(6) 黄丕烈の嘉慶二十四年付の跋文。

「前四卷復從顧氏所藏精抄本校一過、然不可拋者多、非特刻在成化、較余所見本之後、而不知妄作、或重刻所改、或伝写所致。茲一一校出、是者可補余蔵本所不逮、非者益見余蔵本為可貴也。己卯（嘉慶二十四年、1819）秋、復翁校畢識。」とあり、側に「堯圃」印。（巻四の末）

『滄海遺珠』前四卷を顧氏所蔵の小読書堆精鈔本で校勘したところ、（顧氏蔵本の）あてにならない箇所が多いことがわかった。顧氏の蔵本は、成化十三年の刊本に基づくものであるが、私が見たテキストよりも新しい。不見識の者がみだりに刊行した本で、刊行時による改ざん、二重写しによるミスが多い。逐一に校訂し、その優れた箇所でも余の蔵本の不足を補欠するが、その不足の部分によって、余の蔵本の有難さがいっそう目立つであろう、という。

(7) 「道光十六年（1836）正月復毛嶽恂生借読」と墨書、下に「書奴」印が捺される。（巻七末）

(8) 楊士奇の正統元年付の序文。四庫全書本所収の楊士奇の正統元年（1436）に書いた序文を（後述）、小読書堆遺書より全文写している。（巻八末）

(9) 葉福の成化十三年付の跋文。明成化十三年（1477）刊行時に袁州府万載県儒学訓導葉福の寄せた跋文を（後述）、小読書堆遺書より全文書写。（巻八末）

(10) 邵淵輝の道光十三年付の跋文。

「滄海遺珠集足本、旧為味經書屋所蔵、四庫書目謂皆謫戎滇南者所作、蓋未見全帙也。士礼居本即從此伝録、後乃因借觀而放失、扶川常以為憾。今從黃氏購得此本、則較旧蔵而增多楊序、葉跋、且有從顧本校改者。夫合浦之珠、去而復還、固可喜矣、豈況光価之更過於昔乎。扶川於秘笈者若飢渴、宜其墨縁之奇也。道光癸巳（十三年、1833）六月六日、邵淵耀記。」とあり、下に「淵／耀」と鈐印。

（巻八末）

この滄海遺珠集の足本は、張燮の味經書屋の旧蔵書である。四庫全書提要では、雲南の南に流された人のみの作品だと言っているが、（この八巻本後半の四巻の中

にそうでない人も多いので) この足本を見ていなかったためであろう。黄丕烈氏の士礼居本はこの本を摸写したものである。その後、味経書屋蔵本は、人に借りられて無くしてしまったため、扶川(芙川、張燮)は常に惜しく思っている。今、黄丕烈氏より『滄海遺珠』を購入したが、私の無くした旧蔵より、楊士奇の序、葉福の跋が増え、しかも、黄丕烈が顧氏の小讀書堆遺書を底本に校訂している。合浦⁽²⁶⁾の一度なくなった玉が再び戻ってきたのは、もとより喜ばしいことであるが、(黄丕烈による校訂が加えられたため) 価値がなおさら増えたのであろう、という。

また、書中に「癸巳得之士礼居／芙川珍秘」と墨書した紙片があるため、⁽²⁷⁾ 道光癸巳(十三年、1833)に購入したことがわかる。ここにいう邵淵耀の事跡については、つまびらかではない。芙川張燮の友人であろう。

(11) 孫鑿の道光十三年付の識語。孫鑿(秋山)は、張燮(芙川)の依頼で五言詩を書き、『滄海遺珠』の蔵書を称えたもの。長いのでその内容を注に留める。⁽²⁸⁾ 落款に「道光癸巳(十三年、1833)夏日、芙川属題、秋山孫鑿。」とあるので、(10)の邵淵耀と同じ時期に、この識語を書いたと思われる。

以上、長らく跋文や書入れなどを紹介したが、それらを整理すれば、下記のようなことになる。

まず、張燮(味経書屋)は江蘇江寧で序文も目録もないこの八巻本を手に入れた。中に脱落した箇所があるが、校訂できるテキストがないので、とりあえず書庫に納めることにした。〔(4) 張燮の嘉慶五年(1800)付の跋文〕

そして、黄丕烈(士礼居)は張燮の子からこの本を借りて一部を摸写した。〔(3) 黄丕烈の嘉慶二十四年(1819)付の跋文〕しかも、本書に版木が壊れて欠如した箇所があるため、顧之遠(小讀書堆)の精鈔本で補欠した。〔(5) 黄丕烈の書き入れ〕ところが、明成化十三年本に依拠した小讀書堆の精鈔本は、版本が悪くて当てにならない内容が多いことがわかった。〔(6) 黄丕烈の嘉慶二十四年(1819)付の跋文〕但し、小讀書堆の精鈔本の前に楊士奇の序文が、後に葉福の跋文があるため、巻末にそれらを写した。〔(3) 黄丕烈の嘉慶二十四年(1819)付の跋文〕

一方、味経書屋の『滄海遺珠』の蔵本は、他人に借りられて無くしてしまったため、味経書屋の主人扶川(芙川)は常に惜しく思っている。〔(10) 邵淵耀の道光十

三年（1833）付の跋文〕今年（道光十三年）、黄丕烈から再び『滄海遺珠』を購入した。（「癸巳得之士礼居／美川珍秘」という紙片）味経書屋の旧蔵より楊士奇の序文や葉福の跋文が増え、しかも、小説書堆の精鈔本に基づく校訂もあるので、さらに価値が増えた。〔(10) 邵淵輝の道光十三年（1833）付の跋文〕

このようなうよう曲折があったので、『滄海遺珠』を再度入手した喜びを禁じえず、道光十三年（1833）に、邵淵耀や孫鋈にそれぞれ識語を書いてもらい、〔(10) 邵淵耀の道光十三年付の跋文と (11) 孫鋈の道光十三年付の識語〕そして、道光十四年（1834）に謝翠霞が、道光十六年（1836）に復毛嶽悠生がそれぞれ本書を読み、題記を記した。〔(2) 道光十四年謝翠霞識語と (7) 道光十六年復毛嶽悠生の墨書〕そして、道光三十年（1850）にも孫雲鴻が題記を書いた。〔(1) 道光庚戌秋八月復生孫雲鴻〕。

この『滄海遺珠』八卷本は、その後、張乃熊の蔵書に帰した。「苙圃／收藏」（朱文長方印）が捺されるのがその証拠である。

張乃熊（1890～1945）、字は苙圃、または苙伯、浙江吳興の人、上海に居住。古書を嗜好し、とくに、黄丕烈の死後、士礼居旧蔵の蒐集に力を入れ、100点以上の黄丕烈の手沢本を手に入れた。彼の蔵書に『苙圃善本書目』（六卷）があり、1201部、27404巻の本が記録されている。⁽²⁹⁾ そのうち、『滄海遺珠』については、「滄海遺珠集八卷、古歛堂鈔本、一冊、芹伯跋」、「滄海遺珠集八卷、明沐景顛選、士礼居鈔本、四冊、堯圃跋、張子和・邵淵耀・孫秋山跋」と確認することができた。⁽³⁰⁾

張乃熊は抗日戦争中に、父鈞衡の適園以来の蔵書を固守しがたいのを予感して、中央図書館を代表する「文献保存同志会」に譲渡した。その後、これらの蔵書は台湾に運ばれ、中央図書館に保管されるようになったのである。

さて、本書に蔵書印が多数見られる。まず、黄丕烈ゆかりの印、「黄印／丕烈」朱文方印、「堯／圃」朱文方印、「堯圃／鈔蔵」朱文方印、「黄印美鑿」白文圓印、「賦／孫」朱文方印などが捺されている。

そして、張燮関係の蔵書印も数多く捺されている。「小／琅／嬭／福／地」朱文扁方印、「美川張蓉／鏡心賞」白文長方印、「虞山／張氏」朱文方印、「張」白文長方印、「蓉／鏡」朱文方印（2つ、大小・字形同じからず）、「美／川」白文方印、「蓉

／鏡」白文方印、「芙川／居士」朱文方印、「味／経」白文方印、「琴川張蓉／鏡寓目」白文方印、「張蓉／鏡印」白文方印、「芙川／鑒定」朱文小方印等。

2. 清古歛堂鈔本（図3参照）

台湾旧中央図書館蔵、八巻、1冊、鈔本。表紙なし。書高28.3×幅17.3cm。版式等は清呉県黄氏士礼居鈔本と同様。但し、版心には「滄海遺珠卷幾」と葉次が記されているものの、魚尾なし。また、黄氏の校勘の跡や跋文などが見たらない。

巻末に張乃熊の手跋が見られ、この本の顛末につき紹介されている。

「此旧鈔八卷足本、係從昭文張芙川藏本出、以七卷所奪第十六業可證也。黄蕘翁從味経書屋借得、影録一本、并拋小読書堆顧氏鈔本前四卷校一過。顧本源於成化十三年葉福刊、与四庫著録合、多臆改、不如此本善、蕘翁所校以是不為伝録、惟脱佚処則以黄筆填補焉。芹伯張乃熊。」（図4参照）

この八巻の鈔本は、昭文張芙川の蔵本に基づくもので、第7巻の第十六葉が欠けているのがその証拠であろう。黄蕘翁は味経書屋より借りて、一本影写した。そして、小読書堆の顧氏鈔本の前四巻で校勘した。顧本は成化十三年の葉福の刊本によるものであるが、四庫全書本と校勘すれば、改ざんされた箇所が多くて、このテキストのほうがよいので、蕘翁は写すのを止め、ただ脱落した箇所のみ、校正用の白墨で補填した、という。

巻一冒頭に、「苙圃／收藏」朱文長方印、「長州顧／氏藏書」朱文長方印、「湘舟／過眼」朱文方印、「古歛堂／鈔書」白文長方印、「張印／乃熊」白文方印、「芹／伯」朱文方印、「国立中央図／書館收藏」朱文長方印等が見られる。

3. 『滄海遺珠』八巻本の内容

『滄海遺珠』八巻本の前四巻は四巻本とほぼ一緒であるが、後の四巻については、下記の作者の詩が記されている。括弧内の内容は同書の記載に基づく。

巻五（16人、90首）

呂困（常熟人、雲南左布政、著『復庵稿』、37首）・倪謙（江寧人、吏部侍郎、2首）・邢宥（文昌人、僉都御史、1首）・路璧（安福人、雲南右布政、4首）・陳恩（番禺人、贈監察御史、1首）・陳通（番禺人、儒学教諭、1首）・万億（豫章人、雲南都指揮、著『定軒集』、7首）・何経（順徳人、貴州左参政、1首）・

項麒⁽³¹⁾ (仁和人、刑部員外郎、著『愛日齋稿』、11首)・陳述 (蘇州人、四川参政、4首)・劉清 (吉永人、四川按察司副使、1首)・卞榮 (江陰人、戸部郎中、4首)・顔瑄 (江陰人、戸部主事、2首)・張弼 (華亭人、兵部主事、4首)・丁鏞 (上元人、己丑進士、3首)・奚昌 (吳県人、己丑進士、著『輿庵稿』、1首)。

卷六 (11人、81首)

陳政 (番禺人、悦来軒之子、雲南按察司副使、著『西台等集』、56首)・曹景 (句容人、雲南按察司副使、1首)・曹冕 (廷彰之弟、中書舍人、4首)・敖洪 (高安人、贈刑部主事、2首)・敖和 (混混齋之子、雲南按察司僉事、8首)・陶元素 (濟南人、丙辰進士、著『万竹山房稿』、3首)・王清 (濟寧人、広東都指揮、2首)・張寧 (海塩人、汀州府知府、1首)・高榮 (上元人、儒士、著『螢光集』、1首)・積宝明 (蘇州人、2首)・姚瀚 (秦和人、雲南按察司經歷、1首)。

卷七 (2人、100首)

童瑄 (鄱陽人、号玉壺道人、贈吏科給事中、4首)・童軒 (鄱陽人、玉壺道人之子、雲南按察司提学僉事、著『清風亭稿』、96首)。

卷八 (3人、75首)

沈周 (長洲人、著『石田稿』、68首、官職未署)・徐誌 (合肥人、都指揮舍人、6首)・劉溥 (姑蘇人、惠民藥⁽³²⁾ 大使、1首)。

以上、卷五～卷八にかけて計32名、346首の詩が収録されている。この八巻本の第五卷～第八卷については、『続修四庫全書総目提要』(劉思生執筆)では、後の人が付け加えたと言っている。その理由については、第一卷～第四卷では、無名な作者が多いため、「遺珠」という詩集名がつけられた。これに対して、第五卷～第八卷では、作者32人のうち、倪謙⁽³³⁾・卞榮⁽³⁴⁾・童軒⁽³⁵⁾・沈周⁽³⁶⁾らは、すこぶる有名人であるため、詩集名と合わない。そして、日本人僧侶3人が第四卷の最後に置かれているため、すでに詩集の終了を意味している、という。⁽³⁷⁾

確かに、前の四巻と後の四巻で作者が大きく変わった観がある。前の四巻では、字や本籍地のみを記述する(流罪人が多いのが主因であろう)のに対して、後の四巻ではそれ以外に、身分・学歴・著書まで記す。そのうち、中央勤務者(吏部侍郎・僉都御史・贈監察御史・刑部員外郎・戸部郎中・戸部主事・兵部主事・中書舍人、

贈刑部主事、贈吏科給事中) 10人、在地の役人(雲南按察司・雲南布政使・雲南都指揮・雲南都指揮舎人) 9人が最も目立つ。その他、貴州・四川・広東など雲南近辺の勤務者も若干混じっている。そして、進士及第者(丁鏞・奚昌・陶元素)もいれば、著書を有する者(呂困・万僖・項麒・奚昌・陳政・陶元素・高榮・童軒・沈周)も少なくない。彼らの詩は「遺珠」という詩集の名にふさわしくないであろう。

さらに、後者の32名の作者の中で、たとえば、沈周は宣徳二年(1472)の生まれで、『滄海遺珠』の成立(楊士奇正統元年(1436)の序)の際にたった9歳で、沐昂は幼い子供の詩まで詩集に入れる可能性が薄いであろう。⁽³⁸⁾

とにかく、『滄海遺珠』の後の四巻は、沐昂と関連のある詩が多く収録されているものの、別の人が編集したものと考えられる。

三 『滄海遺珠』 諸版本の相違

以上、『滄海遺珠』四巻本と八巻本をめぐって紹介してきた。これらの版本所収漢詩の内容については、大差はないが、書名や提要の内容については、次のような相違が見られた。

1. 書名。『文津閣四庫全書』本、清呉県黄氏士礼居鈔本、清古歛堂鈔本の巻頭に見られる「滄海遺珠集」という書名に対して、『四庫全書珍本』本、『文淵閣四庫全書』本、『雲南叢書』本には「滄海遺珠」と記されている。

2. 目次。『文淵閣四庫全書』本、『四庫全書珍本』本には、本文の前に詳細な「滄海遺珠目録」がついているが、『文津閣四庫全書』本、『雲南叢書』本などには該当しない。

3. 「提要」。『四庫全書』所収本に対して、編集者らはすべて「提要」(解題)を執筆して、本文の前に置いている。この提要の内容はほぼ同じであるが、落款に記された時間については、乾隆四十二年三月(『四庫全書珍本』)、乾隆四十九年閏三月(『文津閣四庫全書』)、乾隆五十二年正月(『文淵閣四庫全書』)、とズレが生じている。

また、その後、四庫全書総編纂官紀昀は、これらの「提要」を本文から抽出して、

『四庫全書総目提要』という本にまとめた。この『総目提要』所収の『滄海遺珠』は、本文の前に置かれている「提要」と、下記のような相違が見られる。(定本は『文淵閣四庫全書』本、括弧内は『総目提要』)

1. 臣等謹按：滄海遺珠四卷、旧本不載撰人名氏 (→滄海遺珠四卷、浙江范懋柱家天一閣藏本、不著編輯者名氏)、前有正統元年楊士奇序称、都督沐公所選。又称其字曰2. 景頤 (→景容)、黔寧王之仲子、佐兄黔国公為朝廷鎮撫西南一方。考明史3. 黔寧王沐英子三人、長春、字景春、次晟、字景茂、次昂、字景高、無字景頤者。考正統元年、晟為黔国公鎮雲南 (→黔寧王沐英之子晟為黔国公鎮雲南)、昂為右都督、4. 鎮雲南都司、与佐兄鎮撫西南者合疑。昂初字景高、仁宗即位以後、避諱而改為景頤。則此書当為昂所撰矣 (→鎮雲南都司、則此集当為昂所編。惟昂字景高、不字景容。疑其初字景高、至洪熙元年後、避仁宗之諱、改高為容、史未及詳。其以第三子為仲子、則疑誤以黔国公為長也。)。所録凡朱經、方行、朱緜、曾烜、周昉、韓宜可、王景彰、樓璉、王汝玉、逯杲、平顯、胡粹中、楊宗彝、劉叔讓、楊子善、張洪范、宗暉、施敬、僧天祥、機先、大用5. 二十一人 (→二十人) 之作、共三百余首、皆明初流寓遷謫於雲南者。每人姓名之下、各註其字号、里居、以其為劉仔肩、王偁諸家詩選所不及、6. 故曰遺珠 (→故名曰遺珠)。7. 其去取頗為精審、在明初總卷之中、猶可称善本、非万歷以後諸選、声氣標榜、珠璣混淆、徒災梨棗者比也。乾隆四十二年三月恭校上。 (→二十人皆無專集、此編去取頗精審、所録多斐然。可觀自古以来、武人能詩者代代有之、以武人司選録、而其書不愧善本者、惟此一集而已。是固不可不伝也。)

如上のような7箇所の不一致が存するため、『滄海遺珠』を利用する際に注意しなければならないであろう。

四 『滄海遺珠』の評価

『滄海遺珠』に対し、最初に評価を下したのは楊士奇で、彼は正統元年(1436)に寄せた序で、本書を高く評価している。

(前略) 我国家文運隆興、詩道之昌、追古作者、選録者不啻十数家。然惟劉仔肩・

王侁所録為庶幾焉。仔肩過略、併録雖精且詳、而猶未免於有遺也。都督沐公以其所得名人之作、其粹者通古近体三百餘篇、⁽³⁹⁾皆前選所不及者、名滄海遺珠、將刻以伝、属余序。余閱其詩、大抵清楚雅則、和平婉麗、極其趣韻、瑩然夜光明月之珍、可愛可玩、而可伝也。

「榮祿大夫少傅兵部尚書兼華蓋殿大学士」担任中の楊士奇は、劉仔肩・王侁の詩選に比較しながら、それ以前にできた明代詩集の遺漏を補完することができる、とまず称える。そして、収録された詩は、「清楚雅則、和平婉麗、極其趣韻、可愛可玩、而可伝也」と高評している。

ここにいう劉仔肩は、字は汝弼、江西鄱陽の人、洪武三年（1370）に50人以上の有名人の詩を収録した『雅頌正音』五巻を編集した。これは現存最古の明代詩歌の総集である。

そして、王侁（1370～1415）は、字は孟揚、または密齋、福建永福県（現、永泰県）の人。明洪武二十三年（1390）の挙人。翰林院檢討、『永樂大典』副総裁などを務める。『虚舟集』がある。

その次に本書を評価したのは、前述の袁州府万載県儒学訓導の葉福で、彼は明成化十三年（1477）正月に下記のような跋文を書いている。

作詩者固難、而選詩者不易、作之不巧、未免有所譏、選之不精焉、得無所遺哉。自朱經而下二十一家、凡詩二百五十餘首、有三百篇之遺意。作之非不巧也、第前人選之不精也。洪惟我朝文運鴻興、都督沐公、博通經典、糜爛詞章、広摭精選若干首、類編成帙、名曰滄海遺珠、板而行之。

詩を作るのは難しいが、詩を選択するのも易くない。下手に詩を作れば、誇られるが、下手に詩を選択すれば、漏れがある。『滄海遺珠』は朱經以下21人、250余の詩を収録し、『詩経』の趣旨を継承したアンソロジーである。これらの詩は巧みであるが、沐昂以前の詩選に漏れた。わが明朝は文運が隆盛で、都督沐昂公は經典に広く通じ、詩文に耽り、詩を広く精選して『滄海遺珠』を編集し刊行した。

清代以降、『四庫全書総目提要』でこのように本書を称える。

（前略）所録凡朱經・（中略）・僧天祥・機先・大用二十人之作、共三百餘首、皆明初流寓、遷謫於雲南者。每人姓名之下、各註其字号、里居、以其為劉仔肩・

王侁諸家詩選所不及、故名曰遺珠。二十人皆無專集、此編去取頗精審、所録多斐然。可觀自古以來、武人能詩者代代有之、以武人司選録、而其書不愧善本者、惟此一集而已。是固不可不傳也。⁽⁴⁰⁾

およそ朱経・(中略)・僧天祥・機先・大用など、20人、300餘首の詩を収録している。みな明代初頭、雲南に流された、もしくは左遷された者ばかりである。すべての姓名の次に、字・号・故郷を記し、劉仔肩・王侁の編集した詩集では及ばないので、「遺珠」という。20人の作者はみな個人の詩文集を有していない。『滄海遺珠』はかなり精選された詩集で、録された詩は素晴らしいものが多い。古より詩の堪能な軍人は各時代にいるが、軍人で詩集を編集し、しかも善本と称せられるのは、この本のみである。よって、本書を伝えなければならない、という。

このように、表現は異なるが、楊士奇、葉福、『提要』は、そろって先人の遺漏を補完する角度から『滄海遺珠』を賞賛する。

そして、楊士奇は所収漢詩を評価し、『提要』は軍人で詩集を編集し、しかも善本と称せられるのはこの本のみだと絶賛している。

結び

以上、『滄海遺珠』の編者、版本、相違、評価をめぐる、論考を進めてきたが、それらを次のようにまとめられる。

1. 『滄海遺珠』は明正統元年(1436)に、雲南右都督の沐昂が編集した詩集で、四巻本と八巻本が現存するが、刊本となったのは四巻本のみで、明成化十三年(1477)の重刊本が、現存最古の版本である。その後、民国三年(1914)に、『文淵閣四庫全書』本に基づく『雲南叢書』木刻本が、地元の文化人により刊行された。
2. 本書は主に写本の形で流布していた。そのうちの清呉県黄氏士礼居鈔本は、味経書屋の張燮から伝写されたもので、その後、黄丕烈が丁寧な校勘を加えたこの伝写本は、張燮に購入され、さらに張乃熊の蔵書に帰した。黄丕烈、張燮、張乃熊はみな名を馳せた蔵書家なので、それらの通蔵を示す多くの鑑蔵印や跋が記されていることから見ても、極めて貴重なものである。

また、この八巻本は四巻本より4巻も上回っているが、後の4巻は他人が付け加

えたと考えられる。

3. 『滄海遺珠』は種々の版本が現存するが、書名や目次、そして「提要」の内容など、多くの点に相違が見られ、利用の際に要注意である。

4. 『滄海遺珠』は地元の将軍に編纂されたものであるが、所収作品は先人の遺漏を補い、斬新な漢詩が多数収録されているため、明清時代から高く評価されている。

(追記) これは2009年12月14日に台湾中央研究院歴史語言研究所で行った講演に基づき手を加えたもので、講演時に、劉序楓博士・廖肇亨博士をはじめとする諸先生より貴重な意見をいただいた。記して感謝の意を表したい。

注

- (1) 王文泰が2005年に復旦大学中国古代文学研究中心に提出した博士論文。指導教官：呉格、2005年4月。その第二章「洪武至弘正時期明人所編明代詩歌総集研究」で、『滄海遺珠』に触れている。
- (2) 『雲南師範大学哲学社会科学学報』1995年6月。『素軒集』や『滄海遺珠』の内容を中心に研究している。
- (3) 『四庫全書総目提要』集部「滄海遺珠」条。
- (4) 明太祖朱元璋の死去後、南京鐘山に埋葬されたため、養子沐英一族や開国功労者の墓も南京に集中するのが多い。1949年以来、南京市江寧区將軍山に、沐氏一族の墓が次々と発見された、という。
- (5) 辛法春：『明沐氏与中国雲南之開發』、台北：文史哲出版社、1985年、103～104ページ。また、李建軍：『明代雲南沐氏家族研究』（瀋陽市：遼寧人民出版社、2002年）もあわせて参照した。
- (6) 『回族典藏全集』（蘭州：甘肅文化出版社・寧夏人民出版社、2008年）155冊に、『素軒集』の明木刻本が収録されている。また、『天一閣書目』（卷四之二・集部別集類）には「三軒詩集」が掲載されている。それによれば、『素軒詩』12巻は、嘉靖三年（1524）に、沐僖の『敬軒詩』4巻、沐璘の『繼軒詩』12巻とともに「三軒詩集」という書名で、後裔の沐崑に重刊された、という。また、「（沐昂）子禧、字可恬、有詩名、授錦衣衛副千戸、早卒、著有敬軒集。」（『雲南通志』卷十七）と沐昂の子禧は、詩が堪能であることが有名で、『敬軒集』がある、という記載も考え合わせれば、『素軒集』は「三軒詩集」の一部であろう。
- (7) 古代、宴会時の遊びの一つ。酒盛りに当たった矢の数で勝負を競い、少ない者が罰杯される。
- (8) 羊叔子（211～278）、三国西晋の開国大臣。名門の出身で、博学能文家として知られる。

- 激しい戦争中にもかかわらず、いつもリラックスした格好をして、心のゆとりを示す。
- (9) 楊士奇：「素軒記」、『東里統集』卷二、13 ページ。『文津閣四庫全書』（集部別集類）本。
- (10) 楊士奇：「滄海遺珠原序文」、『四庫全書』本『滄海遺珠』所収。
- (11) 辛法春：『明沐氏与中国雲南之開發』、103～104 ページ。
- (12) 「雲南自昔矜強梗、交趾（ベトナム）如今息戦争。愧我才疎任方伯（地方長官）、勉將善政治群生。」沐昂：『和邊先生滇南旅思』、『素軒集』卷六、10 ページ。
- (13) 「其所題曰素軒間、（中略）凡古聖賢経伝及歴代之記載、百氏之述作、購積無遺。而楮穎琴瑟之類、所以適性情、娛賓客者、亦靡不具此軒之所儲也。軒之中未嘗有浮人佻士一跡之至、而布衣懷道、秉德方聞（見聞の広い人士）、博雅之流、相與討論義理、商榷古今。或焚香彈絲、或樽俎吟詠、則未嘗一日無也。以其所居之素軒閣、時延風雅之流、燕飲娛樂、講論才芸。」楊士奇：「素軒記」、『東里統集』卷二、13 ページ。
- (14) この跋文は清呉県黄氏士礼居鈔本に孫引きされている。
- (15) 傅增湘もこの成化十三年本につき、「陳燦自題重刊、則初刊尚在此前也。」と同様な見解を示している。莫友芝撰、傅增湘訂補、傅熹年整理：『藏園訂補邵亭知見伝本書目』、北京：中華書局、2009 年、1551 ページ。
- (16) 「吾万載県令陳侯（王注：「侯」は「侯」と同じ）僅得一冊、珍襲歌詠、猶恐伝之未博、故重刻之、以博其伝。可謂善善之心矣。侯名燦、字崇文、癸丑（宣徳八年、1433）貢士、広東海陽人也。成化十三年歲次丁酉春正月袁州府万載県儒学訓導括蒼葉福跋。」
- (17) 本籍地未記載、筆者が付記した。
- (18) 同じタイトルで詩が 2 首の場合、2 首と計算する。たとえば、王汝玉「客懷」（卷二）は 2 首とする。
- (19) 「皆明初流寓、遷謫於雲南者。」『四庫全書総目提要』集部「滄海遺珠」条。一方、清末・民国時代の学者、袁嘉穀が仕事人、流罪人、旅行者（「愚聞其書、皆官于滇、謫於滇、遊於滇者之作。」）と指摘している。袁嘉穀：「滇逐」、『雲南叢書』本『滄海遺珠』所収。
- (20) 「蓋全集多沐氏私交之作也。」袁嘉穀：「滇逐」。その具体例については、前掲（2）余嘉華の論文（49 ページ）に詳しい。
- (21) 「詩皆瀏亮和平之作、与台閣体為近明詩、自李西涯、楊石淙以前皆楊東里一派、此其徵也。」袁嘉穀：「滇逐」。
- (22) 『海王邨古籍書目題跋丛刊』所収。北京：中国書店、2008 年。
- (23) 「滇逐」はその後、袁嘉穀の『滇逐』に所収。『中国少数民族古籍集成（漢文版）』第 87 冊、成都市：四川民族出版社、2002 年。
- (24) 邱永君：「翰林“特元”袁嘉穀」、2008 年 4 月 1 日 http://iea.cass.cn/ygtd/html/mzs_2008040109472053038.htm を参照。
- (25) 同じ道光庚戌（三十年、1850）年の九月、孫雲鴻が宋刻『淮海居士長短句』を閲覧した、という記録が存する。潘祖蔭『滂喜齋藏書記』卷三集部。
- (26) 合浦：広西壮族自治区合浦県の東北にあり、玉の産地として有名。
- (27) 国家図書館特蔵組編：『国家図書館善本書志初稿』（集部総集類）、台北市：国家図書館、1999 年、89 ページ。なお、筆者はマイクロフィルムによる閲覧なので、印鑑等不鮮明な箇所および判定は、本初稿の記載を大いに参考にした。記して感謝の意を表したい。

- (28) 「檢書如揀珠、学古如学海。味経八千冊、累累照乘彩。中有遺珠遺、滄溟失所在。是書沐公選、攸好費蒐采。令祖偶得之、八珍備菹醢。徘徊目序無、誌語標年載。先沢耿難忘、一字珍百琲。何奇翰墨緣、堯翁若儲待。当年伝写本、面目俱無改。葉跋楊序增、繩楷讎豕亥。矻矻好古心、垂白勤無怠。神往跡猶存、百感衆流匯。且擬夜光還、心花怒榮蓓蕾（筆者注：原文一字多し）。借觀繼謠吟、念德詢嘉乃。道光癸巳（十三年、1833）夏日、美川属題、秋山孫鑿。」
- (29) 喬衍瑄：「影印『苙圃善本書目』序」、『書目三編』所収、台北：広文書局、1969年、2ページ。
- (30) 張乃熊：『苙圃善本書目』、『書目三編』所収、台北：広文書局、1969年、140ページ、188ページ。
- (31) 中国科学院図書館整理：『統修四庫全書総目提要』（稿本）第27冊（99ページ）では、項麒を項麟と誤認。齊魯書社、1996年。
- (32) 脱落があり、惠民藥局のことを指すであろう。元の時代以来設置された病院。
- (33) 倪謙、字は克讓、浙江錢塘の人。官、礼部尚書に至り、『朝鮮紀事』が存する。
- (34) 卞榮、字は華伯、江陰の人。詩が得意、画が巧み。正統十年（1445）の進士、戸部郎中等を務める。
- (35) 童軒、字は士昂、鄱陽の人、景泰二年（1451）の進士、官、吏部尚書に至る。著に『清風亭稿』がある。
- (36) 沈周、字は肩南、石田を号とする。江蘇長洲（現、蘇州呉県）の人。文徵明・唐寅・仇英と肩を並べた有名な画家。
- (37) 「（八卷本）為最足本。然前四卷大半為闇淡之人、故以“遺珠”為名。況收至僧三人、似乎已完、後三十二人、如倪謙、卞榮、童軒、沈周、大名鼎鼎、幾乎無人不知、与“遺”字殊覺不合、其為後人所統歟。『統修四庫全書総目提要』（稿本）第27冊、99ページ。
- (38) 王文泰：『明代人編選明代詩歌総集研究』第二章、2005年4月。8ページ。
- (39) 楊士奇の『東里統集』（卷14）所収の「滄海遺珠序」では「二百余篇」とされている。『天津閣四庫全書』（集部別集類）本。
- (40) 『四庫全書総目提要』集部「滄海遺珠」条。

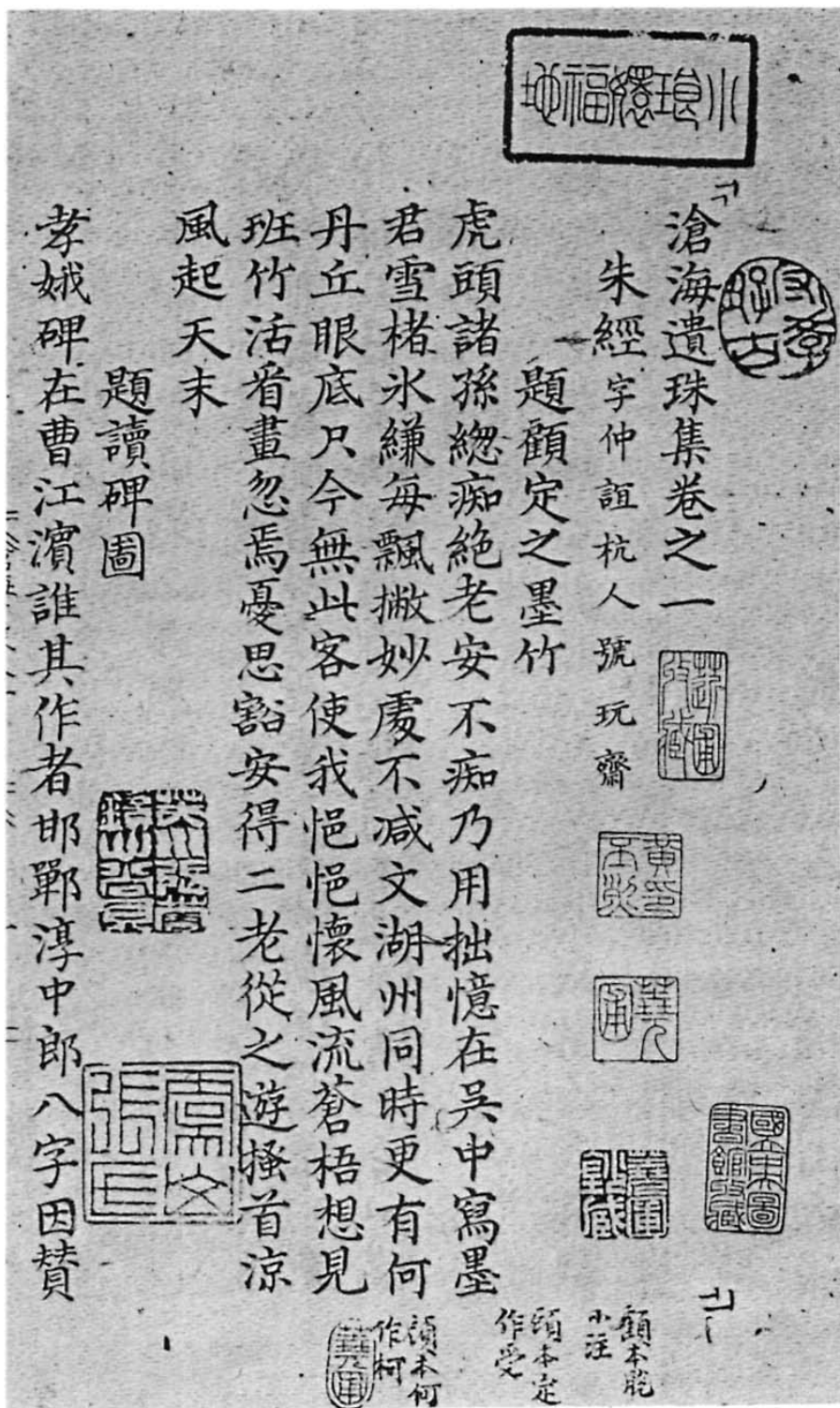


図1. 清呉県黄氏士礼居鈔本卷首

補注楊余既注昭文同年張石和主嗣延借得滄海
 序後方遺珠以卷抄藏之已幸較 四庫本多詩
 信見自 不彙系 四卷然無而序并目不知何以有之吾今以是
 星非白 之并伏讀 四庫主書提要の知有楊士奇
 法程信之序得悉遺者為沐英後人其心右の卷
 右外是 夫 數未不之及頃見小讀也堆遺本於鈔本而
 已の私 載楊序而後有成化間葉福跋云吾萬載
 後有 之陳侯僅得一冊珍秘公融誦猶恐傳之未
 博故重刻之以博其傳方信の卷之心得幸也因






図2. 清呉県黄氏士礼居鈔本にある黄丕烈の嘉慶二十四年付の跋文

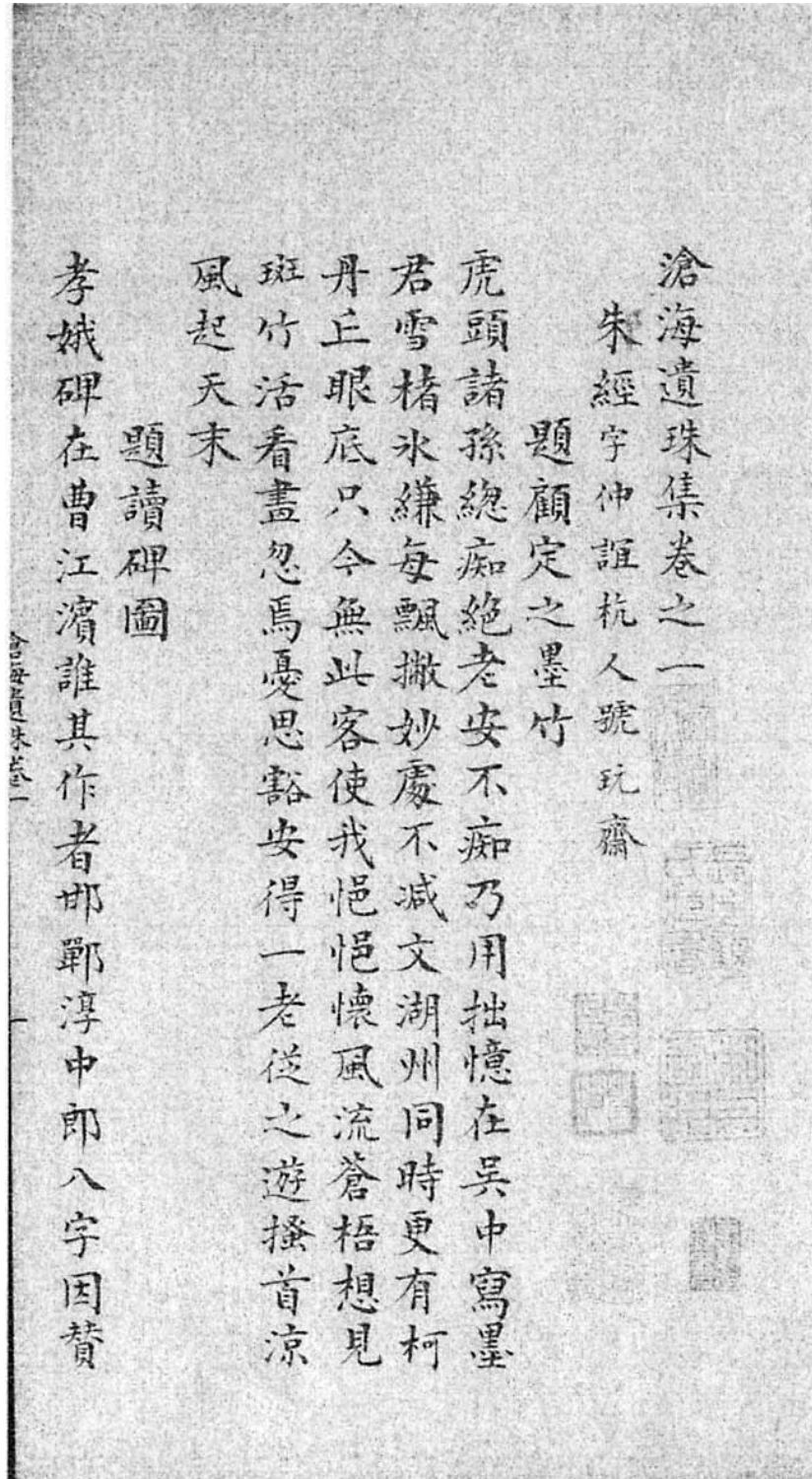
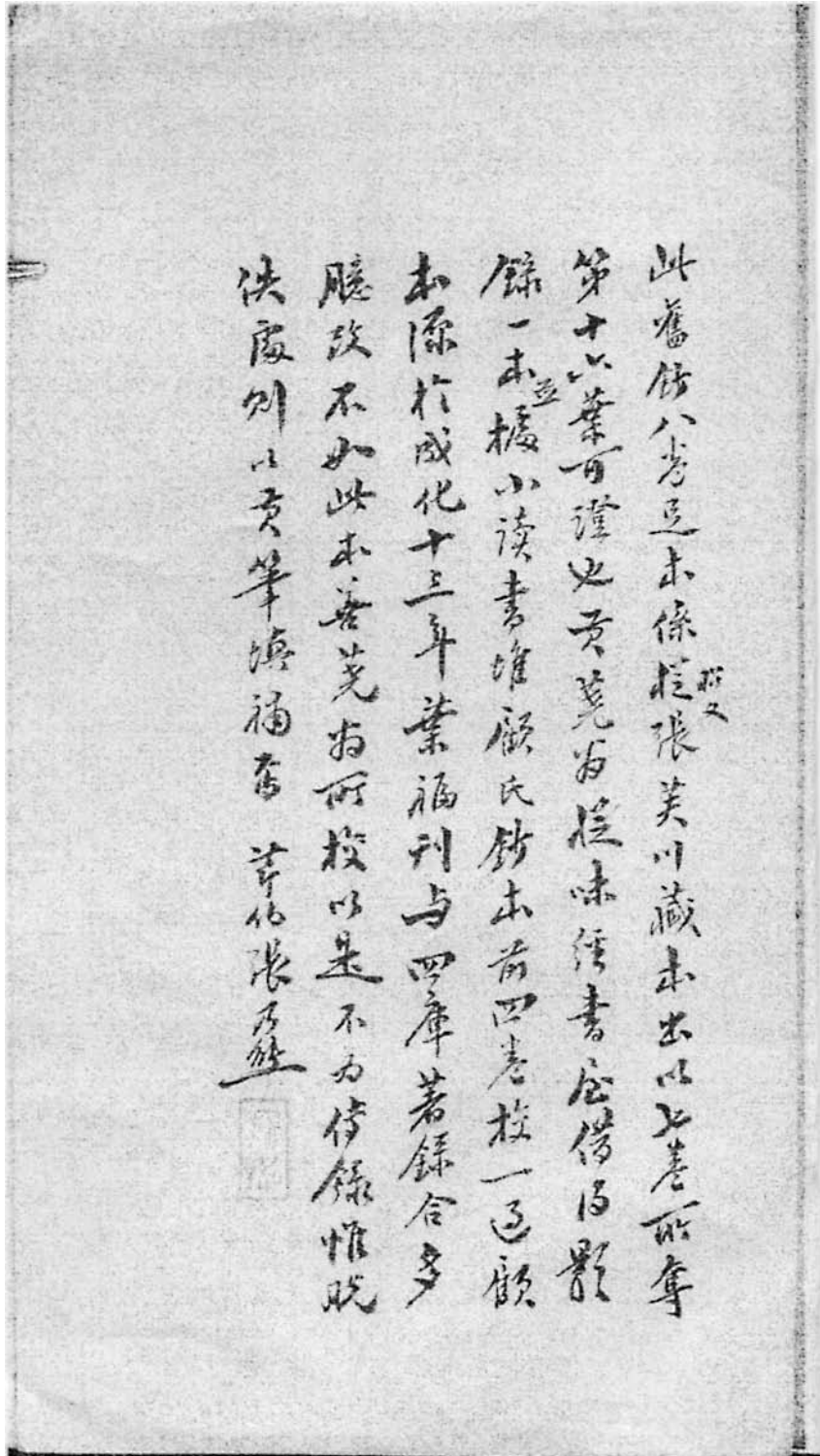


図3. 清古歛堂鈔本卷首



此舊鈔八考豆未係^張張美川藏未出以上卷所奪
 第十^六葉可證也黃堯為佳味佳書全借得影
 錄一本^並據小讀書館顧氏鈔本前四卷校一區顧
 本係於成化十三年葉福利與四庫著錄合多
 臆改不如此本若堯所校以是不為傳錄惟既
 佚處則以黃筆填補在 黃化張乃熊

図4. 清古歛堂鈔本卷末にある張乃熊の手跋